

佐竹義昌先生の思い出

駿河台大学教授 河野 豊弘

学習院大学を定年退職するに当って、研究室を整理していた時に、佐竹と書いた贈答物が見つかった。なかをあけて見ると、紅白で2つずつを包んだ大型の角砂糖であった。これは多分、佐竹先生の晩年の結婚のお祝いに対するお返しであったと思う。あるいは病気の快復のお祝いであったかもしれない。早速甘いものの好きな小生は、コーヒーや紅茶に沢山入れて飲み出し、佐竹先生を日々思い出しつつ、手紙でも書こうかと思っていたところ、急に亡くなられてしまった。

小生が昭和38年に学習院大学に来た時には、すでに佐竹先生と宇野先生は大学で教えておられて、小生はいろいろお世話になった。当時、経済学部の独立の後に経営学科の新設が計画され、その計画をねるために、よく3人でいろいろ計画を相談したものであった。時には目白近辺に酒飲みにも行ったこともある。

小生がはじめて学習院に来た時に、経営学研究会の部長の役を小生にすぐ譲って下さり、その会報に小生を紹介して、テニスは名人だそうです、などと書いてくれたものであった。その後も小生をたえずはげましてくれた。あなたは活動的ですね、などと言われると、本人もその気になるものである。

佐竹先生の専門は交通論、交通経済論、人事管理論であり、小生も国鉄に居た時から御高名を知っていた。とくに初めは運輸調査局に居られ、当時はそこには高宮晋、占部都美、大島国雄らの著名な学者が居られた。この4人ともに小生がたえず接し、たえず啓発された学者達であったが、そのうち3人がすでに亡くなられたのは寂しい限りである。今は佐竹先生からいただいた角砂糖を毎日なめ乍ら、切ない思い出を甘くしようとしているのである。

(1992年6月1日)